

# 『通俗唐玄宗軍談』の翻訳の方法

その典拠と翻案の様相

熊 慧 蘇

## 1

『通俗唐玄宗軍談』<sup>①</sup>は、唐の初世から紹介し、則天武后が太宗の寵を一身に集めること、武后が高宗の後宮に入り、二代后となり再び恩寵を専にしたこと、高宗の崩後に武後の放縱により武氏の乱の起こること等を初めとして、玄宗の軍談に入り、玄宗が楊貴妃の寵に溺れて安祿山の乱を招いたことを中心に、最後肅宗が崩じて代宗の世となるを以って全書を取めている。その作意は序文を引用すると「篇篇讀了、以躬自省、則一部軍談、可以教正直仁恕、何在必使不識字者崎嶇於史籍之間」のである。つまり、作者はこの本を通して、漢字が読めない一般の人々に「正直仁恕」を教えようとしているのである。

『通俗唐玄宗軍談』は江戸前期、中国の講史小説を中心に翻訳、後に翻案を交じえた「通俗軍談」というジャンル中の一作である。「通俗軍談」について、徳田武氏は論文「中国講史小説と通俗軍談」<sup>②</sup>の中に詳しく論じている。氏は「通俗軍談と長編読本は密接な深縁関係を持っていた」と言い、通俗軍談は読本前史と位置づけている。さらに、「通俗軍談」の発展過程について、「元禄初年の忠実な翻訳紹介から始まって、『両漢紀事』の如き講史小説が出現し、さらにまた宝永・正徳にかけて翻案がまじりこみ、享保に及ぶと部分的には読本とも見なされるまでの翻案が施される過程だった。それは一口にいえば、翻訳から翻案が生ずる道程、だった。ということは、中国講史小説の翻訳から読本的なものが発生してゆく道程でもあった」と述べている。『通俗唐玄宗軍談』については、「資治通鑑」を読物化したと見られ、白話小説の翻訳ではないよ

うである」と指摘し、さらに、『通俗唐玄宗軍談』は「原作が判明していない、というよりも、それらは『資治通鑑』等の史書に基づき、作者が適宜創作した可能性が強く、創作に際しての諸典拠の究明、創作の方法などについては全く解明されていない」<sup>③</sup>と言う。

本稿は『通俗唐玄宗軍談』（以下『軍談』と略称する）が典拠とした漢籍の部分と作者独自の翻案部分をそれぞれ究明し、作者が漢籍を引用しつつも自分なりの解釈をいれ、創作を加えた意図、即ち、翻訳の方法を明らかにしようとするものである。

## 2

まず究明したいのは、『軍談』の典拠である。徳田武氏によると、『軍談』は『資治通鑑』を読物化したものである。また、『軍談』本書の序にも「採之於唐書、質之於通鑑、其余在人口。搜之於野史」と書かれている。ということは、『軍談』の主な典拠が『資治通鑑』であることに違いはないということである。

しかし、今回の調査で『軍談』が主な典拠としているのは、『資治通鑑』<sup>④</sup>だけではなく、『資治通鑑綱目』<sup>⑤</sup>もそうであることが判明した。その根拠としては、①出版年代による、②『軍談』の全書の構成による、の二点である。

①出版年代については、『日本古典文学大辞典』によれば、「近世に入っては、朱子学の盛行につれて『資治通鑑綱目』の方が行われ、慶長9年（1604）の林羅山の「読書目録」にも見え、寛文年間（1661-1673）、鶴飼石斎点本（京都八尾勘兵衛刊）、三宅鞏革斎点本（梅花堂刊）の二通りも出ている。『資治通鑑』そのものはこれより遅れて、寛政2年（1790）に、元の胡三省注・明の陳仁錫校本が、医学院より出版され出したが未完に止まり…」と述べている。ということは、『資治通鑑』が近世で広く読まれるようになったのは寛政以降のことであり、『軍談』が成立した宝永2年ごろは『資治通鑑綱目』の方が一般の人々に読まれているのである。

②さらに、『軍談』の目録を見ると、その各話の題が『資治通鑑綱目』の

「綱」とまったく同じ、もしくは「綱」の一部を切り取ったものが、全20巻148題の内、ほぼ半数の70題もある。その中巻之十四の6つの話の題はすべて『資治通鑑綱目』の「綱」から取ったものである。下に挙げるのは『軍談』巻之十四の各話の題とそれに対応する『資治通鑑綱目』の「綱」である。

『軍談』・巻之十四	『資治通鑑綱目』・卷四十四・綱
太子至平涼	太子至平涼
賊將孫孝哲陷長安	賊將孫孝哲陷長安
太子即位於靈武	秋七月、太子即位於靈武、尊帝為上皇天帝、以裴冕同平章事。
令狐潮圍雍丘	令狐潮圍雍丘、張巡擊走之。
常山諸將討殺王備	常山諸將討殺太守王備。
上皇遣使奉冊寶	史思明陷九門。上皇遣使奉冊寶如靈武。

それに対して、『資治通鑑』の場合は各巻すべて一つの文章であり、『資治通鑑綱目』のような「綱」と「目」がない。『軍談』の題に相当する文章も少なく、あるとしてもごく一部であり、従って、『軍談』があえて『資治通鑑』から引用したとは考えにくい。

ここで同じく『軍談』の巻之十四を例として、『資治通鑑』の同じ部分の文と対照する。

『軍談』・巻之十四	『資治通鑑』・卷二百十八・唐紀三十四
太子至平涼	太子至平涼數日、朔方留後杜鴻漸……
賊將孫孝哲陷長安	凡十日、乃遣孫孝哲將兵入長安……
太子即位於靈武	肅宗即位於靈武城南樓、群臣舞蹈、上流涕歎歔。
令狐潮圍雍丘	令狐潮圍張巡於雍丘、相守四十餘日……
常山諸將討殺王備	常山太守王備欲降賊、諸將怒、因擊毬、縱馬踐殺之。
上皇遣使奉冊寶	上皇臨軒、命韋見素、房琯、崔渙奉伝國寶玉冊詣靈

以上の三書の構成、主として、題の付け方から見ると、『軍談』が参照したのが『資治通鑑綱目』であることは明らかである。

ところが、『軍談』はすべて『資治通鑑綱目』（以下『綱目』と略称する）に従っているということでもないようである。具体的な内容を見ると、『軍談』の文章は『綱目』の文章よりも『資治通鑑』の文章を翻訳しているのも分かる。そもそも、『綱目』は『資治通鑑』の概要を纏めたものであるため、内容が同一であることは当然で、全く同じ文章の部分も少なくない。その部分においては、『軍談』がどちらを参照したかを判断しにくい。しかし、さらに全体的な文章を見ると、『軍談』が、省略した『綱目』の文章を引用するよりも、より詳しく書かれている『資治通鑑』の文章を中心に引用して翻訳しながら、物語化しているのが見える。

同じく『軍談』の巻之十四の例を挙げると、1番目「太子至平涼」の話の始めに、『軍談』は『資治通鑑』のこの部分と対応するところと同様に「広平王俶」と「建寧王倓」の二人の話を出している。『綱目』は「広平王俶」のことを省略して、「建寧王倓」の話だけ記載している。

そして、2番目「賊将孫孝哲陷長安」の話のところは、『綱目』がただ「遣孫孝哲将兵入長安、殺妃、主、皇孫数十人…」と簡単に史実を述べるだけだが、『資治通鑑』が「遣孫孝哲将兵入長安」の史実を記載すると共に、「孝哲為祿山所寵任、尤用事、常與嚴莊争權；祿山使監関中諸将、通儒等皆受制於孝哲。孝哲奢侈、果於殺戮」のように、孫孝哲の人柄についても描いている。『軍談』も『資治通鑑』と同様に孫孝哲の人柄について書いている。

然ルニ孫孝哲ハ祿山ガ為ニ最モ寵愛セラル故万事ヲ彼ニ任セケル此ニ依テ嚴莊高尚カ等ト權ヲ争テ其中不平ナリ祿山ハ今度関中ヲ守ル諸大将ハ申スニ及ス通儒カ輩ニ至ルマデ万事ノ儀皆々孝哲カ指図ニ承ヘキ旨ヲ云渡セリ孫孝哲モトヨリ衣色珍味ノ侈ヲキハメ殺戮ニ意ヲ励シ…

この文章と上記『資治通鑑』の文章を対照してみると、『軍談』は『資治通鑑』の文章に従って書かれるのがよく分かるだろう。

同様に、3番目の「太子即位於靈武」の話もこうである。

是日、即位於靈武、尊帝為上皇天帝、大赦、改元… 『綱目』

是日、肅宗即位於靈武城南樓、群臣舞蹈、上流涕歎歎。尊玄宗為上皇天帝、赦天下、改元。 『資治通鑑』

是日靈武城ノ南樓ニテ皇帝ノ位ニ即セ給フ是ヲ肅宗皇帝ト申奉ツリ群臣蹈舞シテ万歳ヲ賀シ奉レリ…即チ帝玄宗ヘ尊号ヲ奉ラセ給ヒ是ヨリ上皇天帝ト申奉レリ時ニ天下ニ大赦ヲ行ハレ改元アリテ… 『軍談』

上文の下線部分を比べると、『軍談』のこの部分も『資治通鑑』を訳しながら書かれることが分かる。

このような現象は『軍談』の全体にわたりみられる。しかし、なぜ作者はわざわざほぼ同じ内容である『資治通鑑』と『綱目』を両方使っているのだろうか。これはおそらく両書の出版状況と関わっているのであろう。先に述べたように、当時『綱目』は『資治通鑑』より早めに出版されていた。そのため、人々によく読まれており、親しみがある。それに対して、『資治通鑑』は写本などの形で伝わっているが、人々によく読まれていない。『綱目』をもって『軍談』の枠組みにすると、読者は目録を読んで話の内容をキャッチすることができる。それに、より内容豊富な『資治通鑑』の文を引用することによって、物語の表現が豊かになり、読者の興味を深めることができる。このような組み合わせをすることから、作者の読者に対する配慮が見られ、ある程度、本書の作意と創作方法のあり方も見られる。

ところが、『軍談』はただ全体的に『綱目』に従って枠組みをし、『資治通鑑』を以って内容とするだけではなく、新・旧『唐書』、『長恨歌』、『長恨歌伝』、『楊太真外伝』、『梅妃伝』、『開元天寶遺事』などの詩歌、小説をも典拠としているのである。

作者が諸典拠を引用するにあたり、一つの注目すべき特徴が見られる。それ

は『綱目』に従って各話の題をつけ、時代順に各歴史事件を記述し、具体的な史実の記述に関しては、『綱目』と『資治通鑑』の他、『唐書』を訳しているところもある。さらに、有名な歴史人物に関する部分になると、史書の他、伝奇小説や唐人筆記からモチーフを借りることも見られる。例えば、唐玄宗・楊貴妃・安祿山・楊国忠・則天武后などに関する話である。そして、その部分は話の題も『綱目』から離れることが多く、作者が付けたものと、場合によっては、唐人筆記中のモチーフの題を使うことも見られる。

この特徴が最もよく反映している部分は『軍談』の楊貴妃に関するところである。楊貴妃は唐の時代に大きく影響を与えた女性であり、彼女によって中国の歴史は変えられたという説さえある伝奇的な人物である。楊貴妃を描く文学作品は唐代から数多く見られ、日本でも古くからそれを受け入れて、さらに新たな伝説が生まれ、人々に親しまれている。『軍談』の校定者林九成も「蓋本邦自古盛伝明皇楊妃之事至于野史俗謡暨婦人小子之常談莫不称其風流華麗」と述べている。『軍談』の作者も作品の中に中国の歴史と伝説を引き受け、猶創作を加えたのである。この部分は『軍談』における漢籍の翻訳・翻案の様相をよく反映している。従って、本稿はこれから具体的な分析に関して、『軍談』中の楊貴妃に関する部分を例として取上げて論ずることにする。

次は、『軍談』がどのような史実に従いながら、伝説を取り入れているのかを分析してみる。

### 3

歴史上の楊貴妃は唐開元7年(719)に蜀に生れ、開元23年(735)に唐玄宗の第十八子、寿王瑁の妃となる。開元28年(740)に女道士として太真宮に入り、天宝4年(745)貴妃に冊立される。至徳元年(756)に馬嵬で縊死される。短い38年の生涯であった。新・旧『唐書』は「列伝・后妃」の中でその一生を記載しており、『資治通鑑』『綱目』は時間順で全編の中に織り込んでいる。『軍談』が『綱目』に従って時間順で書いていることは先にも言ったが、具体

的な内容は史書だけではなく、小説・筆記などのモチーフも使われている。

『軍談』は巻之七から楊貴妃のことを書き始めている。全書の中に楊貴妃と唐玄宗の物語を中心に書くところは8巻15話ある。しかし、この15話の題を見てみると、『綱目』の「綱」から取ったと思われるのは巻之八の第3話「安禄山兼御史大夫」、巻之十二の第1話「平原大守顔真卿起兵討賊」、巻之十三の第3話「帝出奔蜀」の僅か3つである。その他、巻之十の第6話の「帝幸華清宮」も『綱目』の「冬十月帝如華清宮」から来たと考えられるが、それ以外は唐人筆記から取ったか作者自身の創作かと思われる。話の内容に関しては、一つの話の中に史実を挙げ、そして、伝聞・逸事をもって膨らませ、かつ日本的なイメージにあわせて描くことが多い。全体的に、『綱目』の「綱」を題にしたとしても、その話の内容はすべて史実に従うことがない。反って、『綱目』の「綱」を題にしていない話の中には、『資治通鑑』『綱目』の内容を使ったりすることがある。

今回の調査でこの15話の中、主に典拠として使われた漢籍は下表の通りである。

軍談	漢籍
楊貴妃始入太真宮 卷七・6	『資治通鑑』『長恨歌』『長恨歌伝』『楊太真外伝』
玄宗皇帝賞牡丹 卷八・1	『太平広記』
楊貴妃之寵 卷八・2	『資治通鑑』『楊太真外伝』『開元天寶遺事』
安禄山兼御史大夫 卷八・3	『綱目』『楊太真外伝』『安禄山事跡』
華清宮 卷八・4	『太平広記』
風流陣 卷九・2	『開元天寶遺事』『太平広記』
百尺竿頭之戯 卷九・3	『楊太真外伝』
梅妃寵衰 卷九・4	『梅妃伝』
安禄山私発逆意 卷十・2	『綱目』

帝幸華清宮	卷十・6	『開元天寶遺事』『楊太真外伝』
楊貴妃本為仙女	卷十・7	漢籍に典拠見当たらず
平原大守顔真卿 起兵討賊	卷十二・1	『綱目』
帝出奔蜀	卷十三・3	『資治通鑑』『楊太真外伝』
上皇再臨幸華清宮	卷十八・3	『楊太真外伝』
道士自蜀來至蓬萊	卷十九・7	『長恨歌』『長恨歌伝』『楊太真外伝』

上表で分かるように、『軍談』は『資治通鑑』『綱目』の他、『長恨歌』『長恨歌伝』『楊太真外伝』『開元天寶遺事』などを多く使っている。ここで、『軍談』はそれらを典拠にしながら、どのように翻訳や翻案を行っているのかを見てみよう。

最初の「楊貴妃始入太真宮」は、主に『長恨歌伝』前半の筋を使っているが、『長恨歌』の句もそのまま引用したりし、『楊太真外伝』のモチーフと『資治通鑑』の文も部分的に翻訳を行っている。その論拠は以下の通りである。

玄宗は寵愛する武恵妃が死んだ後、「宮中ニ良家ノ女千万数アリト雖モ御目ヲ悦バシムルニ足ズ帝ノ意忽々トシテ楽ミ給ワズ」と『軍談』が書いている。同じような事を書いている漢籍は『長恨歌伝』<sup>⑥</sup>『旧唐書』『楊太真外伝』<sup>⑦</sup>『資治通鑑』がある。下記の四書の文と対照して見ると、『軍談』が『長恨歌伝』のこの部分を翻訳しているの是一目瞭然である。

#### 『長恨歌伝』

宮中雖良家子千万数、無悦目者。上心忽々不楽。

#### 『旧唐書』

後庭数千、無可意者。

#### 『楊太真外伝』

後庭雖有良家子、無悦上目者。

#### 『資治通鑑』



後宮数千。無當意者。

更にその次の「時ニ歳毎ノ十月ニハ驪山ノ温泉宮ニ行幸ナル内外ノ命婦、態ヲ盡シ粧ヲ飾リ羅ノ襪繡ノ裳ハ藍ヨリモ青ク花ヨリモ尚紅ナリ」の文も『長恨歌伝』の「時毎歳十月、駕幸華清宮、内外命婦、鍠耀景従」によっている。

その次の玄宗が息子の嫁である楊貴妃を見て喜び、自分のものとする部分は『資治通鑑』に従っていることが下記各書の文の対照で分かる。

### 【軍談】

或人此心ヲ察シテ帝第十八ノ御子寿王ノ妃楊氏ノ美麗ナル由ヲ奏ス帝行幸ノ折節御覽アリテ悦嘉セサセ給ヒ潜ニ高力士ニ詔ノリシテ楊妃ノ意トシテ寿王ノ宮ヲ出サシム…高力士ガ計ヒトシテ女官タラン事ヲ乞シメ召テ女官ト為レ其名ヲ大真ト号シ大真宮ニ納給ヘリ然ルニヨリ寿王ノ為ニ左衛中郎将韋昭訓ガ女ヲ娶シメ給ヒケリ楊大真宮中ニ内テ

### 【楊太真外伝】

開元二十二年十一月、婦于寿邸。二十八年十月、玄宗幸温泉宮、使高力士取楊氏女於寿邸、度為女道士、号太真、住内太真宮。天宝四載七月、冊左衛中郎将韋昭訓女配寿邸。是月於鳳凰園、冊太真宮女道士楊氏為貴妃。

### 【新唐書】

玄宗貴妃楊氏…始為寿王妃…或言妃資質天挺、宜充掖廷、遂召内禁中、異之、即為自出妃意者、丐籍女官、号「太真」、更為寿王聘韋昭訓女、而太真得幸。

### 【資治通鑑】

或言寿王妃楊氏之美、絶世無双。上見而悦之、乃令妃自以其意、乞為女官、号太真、更為寿王娶左衛中郎将韋昭訓女、潜内太真宮中。

このことについては、『旧唐書』と『長恨歌』が触れていない。『長恨歌伝』も「詔高力士潜搜外宮。得宏農楊元琰女於寿邸」の曖昧な一言しか書かれていない。上記四書の下線部を対照してみれば、『楊太真外伝』と『新唐書』も同じ内容を記載しているが、内容と言葉遣いから見ると、『軍談』は『資治通鑑』

を典拠として書かれたと思われる。

しかし、その次の楊貴妃の美を描く文の、上点と下線で示した部分は、『軍談』が全く『長恨歌伝』と『長恨歌』を翻訳しているのが分かる。

### 『軍談』

既ニ<sup>レ</sup>笄<sup>シ</sup>セリ<sup>テ</sup>鬢<sup>髪</sup>膩<sup>理</sup>ニシテ<sup>ニ</sup>織<sup>濃</sup>度<sup>ニ</sup>中<sup>ル</sup>立<sup>居</sup>艶<sup>ク</sup>シテ<sup>漢</sup>ノ<sup>武</sup>帝<sup>ノ</sup>李<sup>夫</sup>人<sup>ノ</sup>如<sup>シ</sup>頭<sup>ヲ</sup>回<sup>シ</sup>テ<sup>一</sup>度<sup>笑</sup>バ<sup>百</sup>ノ<sup>媚</sup>ナル<sup>六</sup>宮<sup>ノ</sup>粉<sup>黛</sup>顔<sup>色</sup>ナ<sup>キ</sup>ニ<sup>似</sup>タリ<sup>詔</sup>ノリ<sup>シ</sup>テ<sup>浴</sup>ヲ<sup>温</sup>泉<sup>ニ</sup>給<sup>フ</sup>湯<sup>滑</sup>カ<sup>ニ</sup>シテ<sup>凝</sup>脂<sup>ヲ</sup>洗<sup>フ</sup>湯<sup>ヨリ</sup>出<sup>テ</sup>体<sup>弱</sup>カ<sup>ニ</sup>力<sup>微</sup>ニシテ<sup>羅</sup>綺<sup>ニ</sup>ダ<sup>モ</sup>任<sup>ザ</sup>ル<sup>ガ</sup>若<sup>シ</sup>光<sup>彩</sup>煥<sup>發</sup>シ<sup>転</sup>動<sup>シ</sup>テ<sup>人</sup>ヲ<sup>照</sup>ス<sup>帝</sup>甚<sup>ダ</sup>悦<sup>バ</sup>セ<sup>給</sup>ヒ<sup>進</sup>メ<sup>見</sup>ユ<sup>ル</sup>ノ<sup>日</sup>ヨリ<sup>寬</sup>裳<sup>羽</sup>衣<sup>ノ</sup>曲<sup>ヲ</sup>奏<sup>シ</sup>テ<sup>遊</sup>宴<sup>アリ</sup>情<sup>ヲ</sup>定<sup>ム</sup>ル<sup>夕</sup>ニ<sup>ハ</sup>侍<sup>女</sup>カ<sup>シ</sup>ヅ<sup>キ</sup>扶<sup>ケ</sup>テ<sup>嬌</sup>テ<sup>力</sup>ナ<sup>ク</sup>始<sup>テ</sup>新<sup>タ</sup>ニ<sup>恩</sup>沢<sup>ヲ</sup>承<sup>ル</sup>時

この文の上点部分が『長恨歌伝』の「既笄矣。鬢髪膩理。織濃中度。挙止間冶。如漢武帝李夫人。別疏湯泉。詔賜澡蚩既出水。体弱力微。若不任羅綺。光彩煥發。転動照人。上甚悦。進見之日。奏寬裳羽衣以導之。定情之夕」の部分  
を訳したことは一目瞭然である。下線の二文は『長恨歌』の「廻眸一笑百媚生、六宮粉黛無顔色」「侍兒扶起嬌無力、始是新承恩沢時」の句の引用も言うまでもないことである。

更にこの話の終わり部分も同様に『長恨歌伝』と『長恨歌』の引用である。

サレバ<sup>楊</sup>貴<sup>妃</sup>驪<sup>山</sup>ノ<sup>雪</sup>ノ<sup>夜</sup>上<sup>陽</sup>ノ<sup>春</sup>ノ<sup>朝</sup>帝<sup>ト</sup>與<sup>ニ</sup>行<sup>ト</sup>キ<sup>ハ</sup>輦<sup>ヲ</sup>同<sup>シ</sup>止<sup>ル</sup>ト<sup>キ</sup>ハ<sup>室</sup>ヲ<sup>同</sup>シ<sup>宴</sup>ヲ<sup>ス</sup>ル<sup>ト</sup>キ<sup>ハ</sup>席<sup>ヲ</sup>專<sup>ニ</sup>シ<sup>寝</sup>ル<sup>ト</sup>キ<sup>ハ</sup>房<sup>ヲ</sup>專<sup>ニス</sup>三<sup>夫</sup>人<sup>九</sup>嬪<sup>二</sup>十<sup>七</sup>世<sup>婦</sup>八<sup>十</sup>一<sup>ノ</sup>女<sup>御</sup>暨<sup>後</sup>宮<sup>ノ</sup>才<sup>人</sup>樂<sup>府</sup>ノ<sup>妓</sup>女<sup>アリ</sup>ト<sup>雖</sup>モ<sup>帝</sup>ヲ<sup>シ</sup>テ<sup>顧</sup>眄<sup>ノ</sup>意<sup>無</sup>ラ<sup>シ</sup>ム<sup>是</sup>ヨリ<sup>六</sup>宮<sup>ニ</sup>復<sup>進</sup>ミ<sup>幸</sup>ヒ<sup>セ</sup>ラル<sup>、</sup>者<sup>ナ</sup>シ<sup>美</sup>蓉<sup>帳</sup>暖<sup>カ</sup>ニ<sup>シ</sup>テ<sup>春</sup>ノ<sup>宵</sup>ヲ<sup>度</sup>リ<sup>春</sup>ノ<sup>宵</sup>ノ<sup>短</sup>ヲ<sup>苦</sup>ン<sup>デ</sup>日<sup>高</sup>テ<sup>起</sup>此<sup>ヨリ</sup>帝<sup>早</sup>朝<sup>ゴ</sup>ト<sup>シ</sup>給<sup>ハ</sup>ズ<sup>歎</sup>ビ<sup>テ</sup>承<sup>ケ</sup>宴<sup>ニ</sup>侍<sup>ツ</sup>テ<sup>閑</sup>ナル<sup>暇</sup>ナ<sup>シ</sup>徒<sup>ニ</sup>殊<sup>艶</sup>尤<sup>態</sup>ト<sup>云</sup>ノ<sup>ミ</sup>ニ<sup>非</sup>ズ<sup>才</sup>知<sup>明</sup>惠<sup>ニ</sup>シテ<sup>善</sup>巧<sup>ニ</sup>便<sup>佞</sup>ナ<sup>リ</sup>帝<sup>ノ</sup>意<sup>ニ</sup>先<sup>ツ</sup>テ<sup>旨</sup>ヲ<sup>サ</sup>トリ<sup>事</sup>ヲ<sup>辯</sup>ズ<sup>此</sup>ニ<sup>因</sup>テ<sup>萬</sup>端<sup>帝</sup>ノ<sup>意</sup>ニ<sup>叶</sup>ハ<sup>ズ</sup>ト<sup>云</sup>事<sup>ナ</sup>シ

### 『長恨歌伝』

驪山雪夜、上陽春朝。與上行同輦、止同室、宴專房、寝專席。雖有三夫人、

九嬪、二十七世婦、八十一御妻、暨後宮才人、樂府妓女、使天子無顧眄意。自意（ママ）六宮無復進幸者。非徒殊艷尤態、獨能致是。蓋才知明慧、善巧便佞、先意希旨、有不可形容者焉。

『軍談』と『長恨歌伝』の upper 部分の漢字を対照すれば、全く同じ漢字遣いである。「女御」と「御妻」の一個所だけ異なるのを除けば、『軍談』のこの部分が『長恨歌伝』を書き下し文にしたのは違いないと断言ができる。「女御」と「御妻」については、作者が中国の「御妻」を日本風に訳したのであろう。また下線の部分も同様に『長恨歌』の「芙蓉帳暖度春宵。春宵苦短日高起、從此君王不早朝。承歡侍宴無閑暇」の句を書き下し文にしたのである。ただし、ここも先と同じ、中国式の「君王」を日本式の「帝」に変えたのである。

その他、『軍談』のこの話中には『楊太真外伝』から取ったモチーフも交じっている。次の「落妃池」の故事は、『楊太真外伝』の冒頭部分を記載している。

楊貴妃小字玉環…父玄琰蜀州司戸。貴妃生於蜀、嘗誤墜池中、後人呼為落妃池…妃早孤

これと比べて見れば、下の『軍談』の文は多少前後のずれがあるが、上点のところの内容と漢字遣いを見れば、『楊太真外伝』と同じであることが判断できる。

抑此楊貴妃ト申スハ蜀州ノ司戸楊玄琰ガ女ナリ即蜀国ニテ誕生ス小字ヲ玉環ト云リ幼キ時父母ニ離レ孤トナレリ誤テ大ナル池ノ中ニ落タル事アリ後入其池ヲ呼テ落妃池ト名ク

『楊太真外伝』から取ったモチーフはこれだけではない。巻之九・第3話「百尺竿頭之戲」中のいくつかのモチーフも『楊太真外伝』から得たと思われる。ここはその中の一つ、「百尺竿頭之戲」のモチーフを見てみよう。

軍談	楊太真外伝
<p>帝或日勤政楼ニ御遊アリシ時教坊ノ妓女ノ中ニ王大娘ト云者アリ善百尺ノ竿ヲ戴キ上ニ蓬萊瀛州方丈ノ山ノ形ヲ作り嬰兒ニ絳旌ヲ持セテ山ノ内ヨリ出入サセ其上ニテ舞ヒ遊見ル人不思議ノ思ヒヲナス爰ニ南華ノ人劉晏ト云者アリ八歳ナリシガ生質聡明ニシテ知恵慧ク人ニ勝シ者ナルニヨリ人皆神童ト号シケル帝召レテ秘書省正字ノ官タリシガ彼ガ為ニ粉黛ヲ施シ巾櫛ヲ與ヘ愛セサセ給ヒケル勤政楼ニ參テ王大娘ガ竿ヲ戴ヲ見居タリシガ劉晏取敢ズ</p> <p>楼前百戲競争新、 唯有長竿妙入神、 誰謂綺羅翻有力、 猶自嫌更着人真、</p> <p>ト賦テケレバ帝ヲ始奉リ貴妃並ニ嬪御ノ末々マデ嘆美時ヲ移シ賞玩一時ニ震テケレバ王大娘ガ術ハ跡ナク引テケリ即チ命アツテ劉晏ニ牙ノ笏黄紋ノ袍ヲ賜リケルガ其日ノ興ト聞ヘケリ</p>	<p>上一旦御勤政楼。大張声乐。時教坊有王大娘。善戴百尺竿。上施木山。状蓬萊方丈。令小兒持絳節出入其間。而舞不輟。時劉晏以神童為秘書省正字。十歳恵悟過人。上召於楼中。貴妃坐於膝上。為施粉黛。與之巾櫛。貴妃令諸（ママ）王大娘戴竿。晏応声曰。楼前百戲競争新。唯有長竿妙入神。誰謂綺羅翻有力。猶自嫌輕更着人。上與妃及嬪御皆歛笑移時。声聞於外。因命牙笏黄袍紋賜之。</p>

上記の二つの文とその漢字遣いを対照して見れば、『軍談』が『楊太真外伝』のモチーフを採用して、翻訳したことが分かる。しかし、両文上点部分の意味上の差はよく解釈ができない。

まず、『軍談』の作者はなぜ劉晏の年は十歳ではなく、八歳にしたのか。唐人筆記『明皇雜録』の中にも同じモチーフが書かれているが、その劉晏の年も十歳となっている。『軍談』が劉晏の年を二歳減らしたのは劉晏をもっと「神童」にしたいか、当時日本の年の数え方が中国と違っていたかとか考えられない。そして、劉晏の詩の第四句がやや違っている。上点で示したように、一文字の違いなので、『楊太真外伝』の「猶自嫌輕更着人」は「猶輕く思い更

に人を着す」の意味であるが、『軍談』の「猶自嫌更着人真」は意味不明である。

このようにやや解釈が違っていても、『軍談』は楊貴妃に関する部分で『楊太真外伝』をも典拠として、その中のモチーフを活用し、自分の文の中へ溶け込ませたことが明らかである。

そして、『楊太真外伝』とほぼ同時代に成立した小説『梅妃伝』<sup>⑧</sup>も『軍談』の材料として使われている。しかし、中国の歴史の中で、梅妃は実在人物でなく、架空の人物である。『軍談』の作者はこのところも歴史に忠実にするより物語の面白さを重視して、ほぼそのまま『梅妃伝』のプロットを使っている。ただし、一篇の『梅妃伝』を前後二つに分けて、『軍談』の中に挿入して二つの話にしたのである。中に『梅妃伝』の一部モチーフを使わないこともあるが、そこに作者が翻案する時の作意も窺われる。ここでまず翻案の仕方を具体的に見てみよう。

『軍談』の巻之六「梅妃寵于後宮」は『梅妃伝』の前半、梅妃の出身と玄宗に寵愛されるころまでを翻案し、巻之九「梅妃寵衰」は『梅妃伝』の後半を翻案している。しかし、同じ作品を翻案していても、「梅妃寵于後宮」と「梅妃寵衰」の翻案の仕方は明らかに違っている。「梅妃寵于後宮」は『梅妃伝』のモチーフを借りて、自分なりの語り方をしている。基本的な人名・地名・物語の流れは『梅妃伝』に従っているが、具体的な数・言葉づかいは原作と異なるところが多い。「梅妃寵衰」はほぼ『梅妃伝』に従って、翻案よりも翻訳に近い筆で書かれている。次に挙げる二つの話の一部を対照して見れば分かると思う。

梅妃寵于後宮	梅妃伝
爰ニ玄宗ノ恩寵殊ニ勝レタル美婦人梅妃ノ由来ヲ考フルニ蒲田ノ仲遜トテ世々医术ヲ業トセシ人アリ麗シキ女ヲ設ケル未ダ襁褓ノ内ヨリシテ能キ幸ヒ有レカシト	梅妃姓江氏蒲田人父仲遜世為医妃九歳能誦二南語父曰我雖女

<p>手中ノ珊瑚ト養育セシ甲斐アリテ既ニ九齡ノ窓ノ前ニ ハ二南ノ詩ヲ誦ジ貞節ノ道アル事ヲ知り深閨ノ花ノ滴 ニ筆ヲ濡シ雲井ノ雁ニ別ヲ感ジ梁ノ燕ニ思ヲ寄ス折々 毎ノ唱詠モ実ニ年ヨリモ臘更ケテ優ニ柔シキ女ナリ或 時父ニ向ヒ我假令女ナリトテモ期スルニ志ヲ立ツベシ ト云ケレバ父喜ノ余ニ詩人ノ貞女ノアルヲ賛メテ作レ ル辞ニヨリ其名ヲ采蘋ト付ケテケリ</p>	<p>子期以此為志父奇之 名曰采蘋</p>
---	---------------------------

梅妃寵衰	梅妃伝
<p>…主上ハ梅妃ノ有所ヲ求給フニ已ニ小黃門ガ為ニ送出 サレ歩ニテ東宮ニ歸給ヒケル主上大ヒニ逆鱗有テ早速 小黃門ハ斬ニケリ其後遺タル鳥ニ翡翠ノ鈿シヲ取添テ 梅妃ノ方ヘ給ワラセラル梅妃御使ニ向テ何ト主上吾ヲ バ深モ捨果給ヤト問ヒ給ヘバ御使答テ主上妃ヲ聊棄テ 給フ御意ニハ非ズ誠ニ太真ノ怒ヲ恐レ思シ召ガ故ナリ ト申スニ梅妃笑玉ヒナガラ主上ノ御意ニ若我ヲ憐ミ玉 バ何肥婢ガ心ニ背ケバトテ恐給ハン是ゾ我ヲ棄給フ御 意ノシルシナリト宣給ヒケル</p>	<p>…上頃覺妃所在已為 小黃門送令歩歸東宮 上怒斬之 遺鳥并翠鈿命封賜妃 謂使者曰上棄我之深 乎使曰上非棄妃誠恐 太真惡（ママ）情耳 妃笑曰怜我則動肥婢 情豈非棄也</p>

「梅妃寵于後宮」のその後は、梅妃が高力士によって後宮に入れられ、唐玄宗に寵愛されることを描いているが、その梅妃の年が十五歳（笄）を「二十計」にして、梅妃によって後宮「幾四万人」が寵を失ったのを「凡三千ノ宮女」にしている。古代の中国で二十歳になってまた嫁に行かないことは滅多にないことであり、二十歳になった女性を後宮に入れることもないようである。ここも前に『楊太真外伝』の劉晏の年と同じく解釈ができない。宮女の数を三千にしたのは、多分『長恨歌』の「三千の寵愛一身にあり」の句からだと思われる。そして、『梅妃伝』中の梅妃が寵を以って玄宗の宣旨を無視することを省略し

ている。これは作者が再三強調している梅妃の「貞節の道を知り」と背いているから、省かれているのであろう。

「梅妃寵衰」の話は、上に挙げた文以外も『梅妃伝』に沿って書かれているのが多い。但し、『梅妃伝』最後の段、唐玄宗が戦乱の後、梅妃を探すに懸賞しながら方士を遣わすこと、梅妃の絵を見て悲しくなり詩を書くこと、昼寝で梅妃を夢見て死体を見つけ、妃の礼をもって改葬することを省略して、「梅妃ノ行衛ヲ尋給ヘト乱兵ニ掛テ空シク成給フカ遂ニ行方知レザリケル」のような一言で物語を結んだ。これは後に玄宗が死んだ楊貴妃に対する思いと重なり、かつヒロインの楊貴妃が妃として改葬されないこともあるため、書き直したのであろう。

伝奇小説の『楊太真外伝』と『梅妃伝』はこのような翻訳と翻案交じりに使われているが、唐人筆記の『開元天宝遺事』<sup>⑨</sup>『太平広記』『安祿山事跡』などのモチーフも『軍談』の中で随所に見られる。例えば巻之九に「風流陣」という題の話があるが、その題でさえ『開元天宝遺事』中のままを使っている。内容を比べて見ると漢籍を翻案したのは明瞭である。

ここで両作の対応する部分の文を挙げてみよう。

軍談	開元天宝遺事
酒酣ニシテ後禁庭ニ出サセ給ヒ宮女数百人ヲ花ノ冑ニ金玉ヲ垂錦ノ鎧ニ珠翠ノ衣ヲ飾セテ貴妃ヲ一方ノ大将トシ帝ハ近臣貴官ノ少年ナル者数百人ヲ召レテ御歡樂ノ余リニ兩陣ト為テ互ニ立ワカレ御戯ニ勝負ヲイドミ争ヒ給ヒケル是ヲ名付ケテ風流ノ陣ト申シケル錦ノ幕繡ノ帳ノ中ニ美色充滿セリ兩陣タガイニ備ヘラナシ雷鼓ヲ撃テ進ミケル旗旌巨纛花ヲカザリ剪花ノ矛翟羽ノ楯打乱タル其気色羅綺ニモタヘヌ装ヒナリ闘クズレテ負タル者ニハ巨觥ニテ酔ルヲ押テ鳩モル飲兼ルヲ笑ヒ	明皇與貴妃每至酒酣使妃子統宮妓百余人帝統小中貴百余人排兩陣於掖庭中目為風流陣以霞帔錦被張之為旗幟攻撃相關敗者罰之巨觥以戲笑時議以為不祥之兆後果有祿山兵乱天意人事不

トセリ勝ル者ニハ絹帛珍宝ノ賞ヲ賜ハル実ニ遊興風流 ノ戯ナリト侍女宦官ハ喜ビヲナセリ又意アル者ハ不祥 ノ兆ト眉ヲ皺ムルモ多カリケル	偶然也
--	-----

この二つのモチーフを合わせてみると、内容はほぼ同じであるが、勝負上の賞罰について、『軍談』は詳しく書いているのに対して、『開元天宝遺事』は「敗者罰之巨觥以戲笑」の一言である。これは『軍談』の作者が翻案の際、より面白くさせるため加えたものと思われる。話は変るが、日本の浄瑠璃・歌舞伎の中に見られる花軍の趣向は、この唐玄宗の風流陣からの習いとも言われている。

『開元天宝遺事』は開元天宝年間の伝聞・逸事が書かれているため、『軍談』の作者の翻案に典拠となるモチーフも多い。「風流陣」の他、『開元天宝遺事』の中に楊貴妃と唐玄宗に関する「随蝶所幸」「助嬌花」「醒酒花」「錦雁」などという題の話も『軍談』の中に見られる。また、楊国忠に関する「夢中有孕」「氷山避暑」「肉陣」「四香閣」など、李白に関する「隔障歌」などの話も『軍談』に取り入れられている。

同様に『太平広記』中のモチーフも『軍談』の中に使われている。例えば、楊貴妃がよく琵琶を弾ける、磬を撃つことについて、『軍談』は『太平広記』中の「楊妃」「太真妃」のモチーフを翻案したことと思われる。また、安祿山に関する話は『安祿山事跡』から取ったものと見られる。

#### 4

『軍談』の校定者林九成は「玄宗軍談凡二十卷専以正史為主旁及諸書蓋実録也」というが、各話の中に多かれ少なかれ作者自身の創作を加えているものが見られる。これは翻案の際、もしくは歴史物を物語化にするとき当然なことである。しかし、一つの話がすべて作者の創作と思われるものもあるようである。楊貴妃の部分で巻十の第7話「楊貴妃本為仙女」はこの例である。



楊貴妃が仙女であることは『長恨歌』を始め、多くの中国文学作品に書かれており、日本に伝わる伝説にも同じ説がある。中国の伝説によると、楊貴妃が死後蓬萊山に至り、玉妃太真という名の仙女になった。日本の伝説では楊貴妃が元熱田明神であり、唐の代を乱れさせ、玄宗の日本攻撃を防ぐため、楊貴妃として生れた、というのが多い。日中の伝説を比較してみれば、楊貴妃は元仙女であるという発想は日本的なものに見られる。しかし、よく中国の作品を読めば、楊貴妃は元仙女であることが分かる。

『長恨歌伝』と『楊太真外伝』とも最後蓬萊山にいる楊貴妃が玄宗のことを思い出すと、こう言った。

由此一念、**又不得居此、復墜下界**、且結後縁。或為天或為人、決再相見、好合如旧。

この話を読むと、「又不得居此」の「又」と「復墜下界」の「復」が気になる。「又」と「復」は、「重ねてまた、ふたたび」の意味であり、この二句は「またここに居られなく、ふたたび人間世界に落ちる」と解釈すべきなのである。つまり、楊貴妃はかつてここで住んだことがあり、何かによって人間世界に落されたのであった。こうなると、やはり楊貴妃は元仙女であるのだ。ところが、なぜ前回人間世界に落されたのかはこの二句から分からない。

『軍談』は「楊貴妃本為仙女」の話をもって、それを詳しく説明しているのである。

春の日、寢覚めた楊貴妃は白い鳳凰が白書を銜えてくるのを見て不思議に思い、その書を取って読むと、なんと「勅謫仙子楊氏爾居玉闕之時常多傲慢謫塵寰之後転有驕矜以声色惑人君以寵愛庇族属内則韓虢蠹外則国忠秉権殊無知過之心頗有乱時之迹比当限満合議復帰其如罪更愈深法不可貸專茲告示且與沈淪宜令死於人世」のようなことが書かれている。これに対して作者は「此意ハ貴妃モト前世仙女タリ暫ク人間世へ謫去セラレテ楊家ニ生レテ楊貴妃ト成然トモ限アリ早人世ヲ去テ仙家ニ帰ルベシトノ事ナリ」と解釈している。

『軍談』の解釈をもって『長恨歌伝』と『楊太真外伝』の句を読めば、ああ、

なるほど、となるが、しかし、漢籍の中に楊貴妃が生前自分が「謫仙子」であるのを予め知ることはどこにもないようである。清の洪昇の戯曲『長生殿』中に、嫦娥の口を借りて楊貴妃が元蓬萊玉妃であることを観客に教えるが、楊貴妃自身はやはり死んでから始めてこれを知ったのである。従って、『軍談』のこの話は発想が漢籍から得たと推測してもよいが、具体的な内容は作者の創作だと考えてよいだろう。

『軍談』の全般を見ると、作者は殆ど漢籍を典拠にして創作を加えているが、本話のような一つの話すべて創作したのはごく稀なことである。これは後に楊貴妃が殺されることと、唐玄宗が方士を遣わして楊貴妃を捜すことの伏線とするのであろう。これもまた『梅妃伝』中のモチーフを切り捨てると同様に、全体的な構造を配慮して創作したと思われる。

以上具体的な分析を通して『軍談』の漢籍による典拠とその翻案の様相を見てきた。『軍談』の全体を見渡すと、作者は翻訳や翻案するというよりも、中国の多量なる原作を頭の中にしっかり入れておき、それを自分の思い通りに組み合わせ、自分の創作をもって、漢籍のモチーフやプロットを上手に一つの文章にしたのである。例えて言えば、作者が中国の原作を骨として組み立て、自分の創作を肉にして、滑らかに仕上げたのである。

ただし、『軍談』は部分的に漢籍を翻訳しながらも、場合によって、人物の評価や事件に対する態度は漢籍と異なることがある。例えば、武則天の故事は短くしているが、人物像に対する評価は『資治通鑑』『綱目』より良いように見られる。歴史上の武則天が王皇后と蕭淑妃を殺したことも触れなかった。楊貴妃の物語も同様に、歴史上の楊貴妃が二回唐玄宗に逆らって後宮から追い出されることがあったのに対し、『軍談』は一度だけ、楊貴妃が寧王の玉笛を吹いたため追い出された、としている。

また、『綱目』の「綱」に従い、時間順で物語を展開しているが、各話中のモチーフの順番は必ずしも『綱目』に沿って書かれる訳でもないのである。

『綱目』の順と前後することもある。

このように『軍談』は人々に親しまれる『綱目』と内容豊富な『資治通鑑』を中心に使用し、多量なる漢籍を基にして、難しい漢籍を分かりやすく仕上げ、自分の作意によって上手に原典の内容を膨らませたり、減らしたりしているのである。このような翻訳と翻案の間に独自の創作を加えることもあるからこそ、『軍談』はただの漢籍の翻訳ではなく、漢籍中の教訓をもって、本邦、つまり日本の人々に「正直仁恕」を教えることができるのである。

#### 注

- ①『通俗唐玄宗軍談』は、宝永2年（1705）に出版され、中村昂然作、林九成校の20巻20冊からなる読本である。板本は『補訂版 国書総目録』によれば、「宮書・岡山大・池田（『玄宗軍談』）・浅野・蓬左・大橋・陽明・仙台伊達家・田中允」などと記載されているが、活字になっているのは早稲田大学出版社が出版した『通俗二十一史』の第9巻に収録されたものだけである。本研究では、国文学研究資料館にある、酒田光丘図書館所蔵宝永2年版『通俗唐玄宗軍談』（C93-162）の紙焼本（E980）を使用した。
- ②『文学』1984.11、vol.52
- ③『日本古典文学研究史大事典』西沢正史・徳田武編 勉誠出版 平成11年3月再版
- ④内閣文庫所蔵 宋司馬光等奉勅編 元胡三省音注 明陳仁錫校 明天啓五序刊 尾張藩旧蔵（函283 号6）
- ⑤内閣文庫所蔵 全59巻、首1巻。宋朱子撰（函283 号41）
- ⑥内閣文庫所蔵 『説郭』第113冊 元陶宗儀編（続）明陶珽編 明末刊（函370 号29）
- ⑦同上
- ⑧同上
- ⑨同『説郭』第54冊

#### \* 討議要旨

相田満氏は、長恨歌その他楊貴妃関係説話の受容を考えるには、抄物（歌行詩注釈）を視野に入れるべきであることを指摘し、また『軍談』「楊貴妃本為仙女」に出てくる漢文の書簡は『軍談』作者の創作なのか、何か出典（例えば『明皇雜録』など）があるのか、と質問し、発表者は、『軍談』独自のものであろうが、更に調査する、と答えた。

湯沼誠二氏は、他の通俗軍談との比較について、あるいはなぜ特にこの作品を取りあげたのかを教えてください、と質問し、発表者は、修士論文において日本における楊貴妃説話受容を研究したので、その流れであって、この作品に何か独自性を見出したというわけではない、と答えた。

木越治氏（座長）は、『資治通鑑』と『資治通鑑綱目』の和刻本出版の時期のずれが、そのまま両書の流布度の差を意味しない、江戸のはじめから両書ともよく読まれていたはずで、むしろ『綱目』を利用しているところに『軍談』の眼目があるのではないかと指摘した。